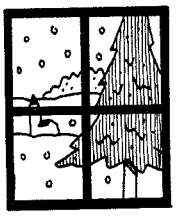
公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2021 年（令和3年）12 月 5 日
第 703 号

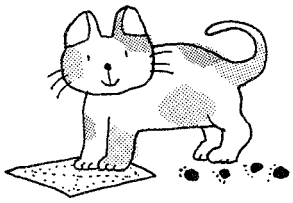
国立市中 1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国 立 市 公 民 館

〈 図書室のつどい　参加者の感想 〉



知らなかった植物の秘密

『かぐわしき植物たちの秘密
ー香りとヒトの科学ー』を受講して



横山 茉央

植物の香りとヒトの科学に関する話を聞いて、植物についての知識が十分にない私も植物の魅力に引き付けられた2時間でした。その中でも私の中で特に印象に残っていることが3つほどあります。

1つ目は、近年のバラの香りは強くないという話です。バラというと入浴剤やルームフレグランスなどに「バラの香り」と表示されていることが多いように思います。私はバラの香りのせっけんなど、香りを選ぶ際はバラを選んでいました。ある時実際にバラが咲いている中に行ってみたいと思い、バラ園に行ったことがあります。そこで思ったのは、「バラの香り」とあるもので香っているあの香りはしないということです。自分の鼻の調子が悪いのか、偶然にもこの場に咲いているバラから香りがしないのかなどあれこれ考えつつ、ぼんやりとしていましたが、今回の図書室のつどいで品種改良と香りが関係していることを知り、あの時バラ園で感じたことは、バラの香りが今は前よりも強くないことがあるからだと分かりました。人工物ではない本物のバラの香りを全身で感じてみたいものです。

2つ目は、歳を若く感じさせる香りについての話です。グレープフルーツが歳を若く感じさせる香りを放っているようです。それもミドル世代の女性だけ、しかも若く感じさせるのは6歳と具体的に示されているのがおもしろかったです。私は今、若者と呼ばれる年齢ですが、中年女性と言われる年齢になったら、グレープフルーツを食べたり、グレープフルーツの香りのする物を身につけたりして、ぜひともグレープフルーツの香りの力を借りたいと思います。若く感じさせる効果の他にも、グレープフルーツの香りを嗅ぐことがダイエットにつながると言われているそうで、様々な力を持っていると思いました。香りが与えるポジティブな影響についてこれほどまでの効果を持っているとは知らなかったため、香りの魅力について実際に試してみたいと思いました。

3つ目は、ピーマンの苦みについての話です。ピーマンに苦みを感じさせる香りがあることが分かり、子ども向けの苦みのない品種が世にあるということを初めて知りました。私は、成長していく中でピーマンの苦みもおいしいと感じられるようになりましたが、幼いころは、苦みを我慢しながら栄養を摂るためと頑張って食べていました。お話を聞いて、ピーマンの苦みについて分かると、そういうことかとピーマンを食べるときの気持ちが変わったように思います。

今回のお話を聞いて、花の香りについて本を読んだり、実際に香りに触れてみたりして、知っていきたいと思いました。花についての関心をもつきっかけとなった今回のお話、図書室のつどいの時間でした。

ブッククラブから

古井由吉 著『辻』に迷って

岩井 としえ

古井由吉の小説は、前にやった『杳子』の時から、読みにくいものと思い、構えて、覚悟してかからないと、と気合を入れて、読み始めた。

「何処に住んでいるのか。誰と暮らしているのか。そして生まれ育ちは――。

構えて尋ねられたくはないことだ。答え甲斐がないように思われる。

現住所は尋ねられれば差障りのないかぎり教える。手紙や書類にも欠かすわけにいかない。あちこちに登録されている。一切届け出ることのできぬ境遇に追い込まれれば、人の生き心地は一変する。しかし住所を書きこむ馴れた手が途中で停まりかける。にわかに、知らぬ所番地に見えてくる。ほんのわずかな間のことだ。既知が昂（こう）じると、未知に映ることはあるものらしい。」

『辻』から始まって『始まり』まで十二篇の連作の冒頭（始まり）だ。特別難しい言葉が出てくる訳ではなく、すっきりとして心地よい。既知と未知なんてわくわくする。一番目を読み終わってすぐ、音読した。いくら短いとはいえ、小説を音読したのは初めてだ。気持ち良かった。音読はここで挫折。この後、読むのが精一杯。ブッククラブでは、全部音読された方がいらした。脱帽。死者と生者の交差するのが『辻』と読む人がいた。生者のことかと読んでいくと、繋がって死者が出てきて、長くても、一つの文の中に出てきてなかなか読みにくい。わからない。嫌いだ。参加者いろいろで一色に染まる心配はない。ここは周りを気にして言う場ではない。自分と合わない小説だからとしても、それを出せる場だ。もっと語り合えたら、と思う。

今回、この感想を書くことになって、蓮實重彦との対談『終わらない世界へ』を読んでみた。中に、古井由吉の「すんなりとした小説を読んだという幻想を与えるべきじゃないか、そういうことで、作家としての義務を果たすべきじゃないかとは思うんですが、自分にはそれができなくていやになるんですよ。ちょっとすんなりとなりかかると、不協和音をたいて、変なほうへ持っていく。」蓮實重彦「でも、それが作家じゃないですか。」古井由吉「なまじな通俗性は排するという立場なんですね。余計人好きのしない道に入るところがある。」なるほど、すんなりわからなくて当たり前。簡単に、共感できないように、仕掛けてあったのだ。ありきたりのものではない、風情を感じたり、安易な感傷などに流されない文学なのか。

一番目の続きから読んでいこう。おや？きた！「嗅アとばばア」ちょっとこれは、とびっくりするが、これは、オリジナルではなく、永井荷風『墨東綺譚』の引用だ。ここから始める？格調高い文学作品読みたい人の顰蹙（ひんしゅく）をかいたい気が少しはあったのかな？と、下世話なものは見逃がさないワタシは勘繰ってしまう。この先、『墨東綺譚』に出てきた戸籍謄本が、『辻』にあり、緊迫した場となっている。戸籍謄本が出てくるのはここだけだが、全編に潜んでいるように見えた。最後の一編が『始まり』？まだ終わらないのか。まだまだ、読み続けていかなくては。読むたびに、新しいものが出てきて終わらない。

くにたちブッククラブ

―人生、野を越え山こえて―

中島らも『今夜すべてのバーで』（講談社文庫）

講　師　榎本正樹（文芸評論家・現代日本文学）
と　き　12月9日（木）夜7時半～9時半
ところ　公民館 地下ホール
申込先　公民館 ☎(572)5141

＊次回は1月6日（木）
松本清張『或る「小倉日記」伝』（角川文庫）です。

アンケートのおねがい

今年印象に残った本は何ですか？

図書室月報では、毎年『今年印象に残った本』の特集をしています。1月号で紹介しますので、ぜひご協力をお願いします。
しめきりは12月10日㈮です。
くわしくは、図書カウンターまでどうぞ。

新着図書から

〈哲学　心理学　宗教〉

死者の力　高橋原（岩波書店）114

〈歴史〉

ホロコースト最年少生存者たち　レベッカ・クリフォード（柏書房）209
咲くやむくげの花　大澤重人（冨山房インターナショナル）210
戦争と軍隊の政治社会史　吉田裕編（大月書店）210
地図帳の深読み１００年の変遷　今尾恵介（帝国書院）290

〈社会科学〉

この国のかたちを見つめ直す　加藤陽子（毎日新聞出版）304
太平洋戦争への道１９３１―１９４１　保阪正康編著（ＮＨＫ出版）309
暴走するポピュリズム　有馬晋作（筑摩書房）311
「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし　加藤圭木監修（大月書店）319
中国（チャイナ）ファクターの政治社会学　川上桃子編（白水社）319
日韓関係史　木宮正史（岩波書店）319
「戦後憲法学」の群像　鈴木敦編（弘文堂）323
女性受刑者とわが子をつなぐ絵本の読みあい　村中李衣編著（かもがわ出版）326
日本の国際協力　阪本久美子編著（ミネルヴァ書房）333
幻の村　手塚孝典（早稲田大学出版部）334
差別はたいてい悪意のない人がする　キム・ジヘ（大月書店）361
地球を壊す暮らし方　ウルリッヒ・ブラント（岩波書店）361
男も育休って、あり？　羽田共一（雷鳥社）366
生きるためのフェミニズム　堅田香緒里（タバブックス）367
コロナ貧困　藤田孝典（毎日新聞出版）368
大麻の社会学　山本奈生（青弓社）368
平和村で働いた　川村幸輝（あけび書房）369
ヒロシマの空白　中国新聞社報道センター
ヒロシマ平和メディアセンター　村本邦子（国書刊行会）369
周辺からの記憶　都筑学（新日本出版社）369
自立って何だろう

〈自然科学〉

海がやってくる　エリザベス・ラッシュ（河出書房新社）452
世界を大きく変えた20のワクチン　齋藤勝裕（秀和システム）493
精霊に捕まって倒れる　アン・ファディマン（みすず書房）493
哲さんの声が聞こえる　加藤登紀子（合同出版）498
人間回復　志村康（花伝社）498
いま言葉で息をするために　西山雄二編著（勁草書房）498

〈工業〉

水俣病事件を旅する　遠藤邦夫（国書刊行会）519
妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティ　橋迫瑞穂（集英社）598

〈芸術〉

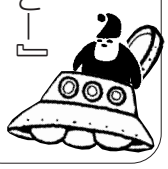
ゴンド・アート　Ｔｏｕｃｈ ｔｈｅ ＧＯＮＤ 編（河出書房新社）722
いわさきちひろと戦後日本の母親像　宮下美砂子（世織書房）726
場末のシネマパラダイス　田村優子（筑摩書房）778

〈文学〉

九十歳のラブレター　加藤秀俊（新潮社）91か
地べたの戦争「言葉を刻む」取材班（西日本新聞社）91こ
薬を食う女たち　五所純子（河出書房新社）91ご
今日でなくてもいい　佐野洋子（河出書房新社）91さ
帰還兵の戦争が終わるとき　トム・ヴォス（草思社）93ヴ
１９２０年代の東京　岡本勝人（左右社）910
疫病と日本文学　日比嘉高編（三弥井書店）910
小川洋子のつくり方　田畑書店編集部編（田畑書店）910お
大岡信　大井浩一（岩波書店）911

〈一節〉

浅羽通明 著『星新一の思想 ―予見・冷笑・賢慮のひと―』



星新一に「小松左京論」という一文があります（『きまぐれ博物誌』所収）。

ある時、小松左京が、「いかにもうれしそう」に「この道に進んだしあわせをかみしめている」といったようすで、星新一にこう語ったという。いわく――、「ＳＦというのは、じつにふしぎな性格を持っている。どんな点かというと、いかなる分野とも接触できることだ。例えば、ミステリーともとなりあわせのような気分だし、文学や童話とも同様。天文学や考古学、エレクトロニクスや超心理学、学問のあらゆる分野に、ストレートにつながることができる。政治、経済、流行、社会現象、落語、アニメーション、その他ＳＦととなりあわせでないものを探すのに苦労するほどだ」と。

これに対して星新一は、同じころ、「それと似てまったく逆なことを思いついていた」そうです。いわく――、「あらゆる分野から一定の距離をおき、その影響から無縁で、超然としていられるのはＳＦ以外にないのではないかという点だ。これについてはある雑誌に書いた。ヨーロッパの錬金術師たちは、政治、宗教、実利といった世俗的なものからの無風圏地帯、すなわち安全地帯に身をおいたからこそ、奇妙な発想ができた。ＳＦも同様であろう」との内容だというのですから、これはエッセイ「錬金術師とＳＦ作家」以外にはありません。

講座参考図書

講座の詳細は公民館だよりをご覧ください。

LGBT だけじゃない、性別の話　～時代とともに変化する最新の性別事情～

講師　新井 祥（しょう）(漫画家、専門学校講師)

１月７日（金）セクシャル・マイノリティや性別に関する多様な価値観とその広がり

１月14日（金）性別がない（＝男女でない中性）という生き方

“かぞく”のかたちを考える

講師　小野 春 (「にじいろかぞく」代表)

１月２３日（日）

＊元女子高生、パパになる……杉山文野（文藝春秋）
＊3人で親になってみた……杉山文野（毎日新聞出版）
＊多様性との対話　－ダイバーシティ推進が見えなくするもの……岩渕功一 編著（青弓社）
＊ひとりひとりの「性」を大切にする社会へ……遠藤まめた（新日本出版社）
＊LGBTってなんだろう？　－自認する性・からだの性・好きになる性・表現する性 ……藥師実芳（合同出版）
＊Xジェンダーって何？　－日本における多様な性のあり方……Label X 編著（緑風出版）
＊同性パートナーシップ証明、はじまりました。
　－ 渋谷区・世田谷区の成立物語と手続きの方法……エスムラルダ（ポット出版）
＊同性婚　だれもが自由に結婚する権利 ……同性婚人権救済弁護団 編（明石書店）
＊グローバル社会と人権問題　－人権保障と共生社会の構築に向けて……李修京 編（明石書店）
＊カラフルなぼくら　－6人のティーンが語る、LGBTの心と体の遍歴……スーザン・クークリン（ポプラ社）
＊排除と差別の社会学……好井裕明 編（有斐閣）

〈私の本棚から　第３回〉

樋口一葉著『大つごもり』

中井 あつし

毎年年末になると読みたくなる小説があります。

今回ご紹介するのは、一八九四年樋口一葉が二三歳の時に書いた『大つごもり』です。まさにこの季節にぴったりな短編小説です。

主人公のお峯は一八歳、芝白金台町の大地主の家に下女として住み込んでいます。

霜凍る師走の暁にたたき起こされ、踊りの稽古に行く七歳のお嬢さまを朝風呂に入れるため桶で井戸から水汲みの挙句転んでしまい、紫のあざが生々しいという、泣けてくるような描写から始まります。この家は意地の悪い後妻が奥様となり、奉公人がひと月と居つかぬなか、お峯は良く辛抱して一年以上勤めています。

師走の一日（あるひ）、主人一家が芝居見物の間に、お峯は昼間だけ暇をもらって、長期闘病中の伯父の住む裏屋を訪ねます。お峯は幼い頃に両親を亡くし、この伯父夫婦が育ての親です。伯父は天秤担ぎの野菜売りですが、もう三ヶ月も稼ぎがなく、お峯が弟のようにかわいがる八歳の従弟がシジミを売り歩いて家計を助けている状態でした。伯父から借金の利息と正月の餅代として二円の金を用立てて欲しいと頼まれ、窮状を見たお峯は受け合い、奥様に話したところ、一応の了承を得ます。

そして大つごもりの昼前、お峯は奥様に二円の借り入れを願いますが、当日朝から前妻の子で今は放蕩三昧の長男が珍しく家に戻って来たため、機嫌が悪くそんな約束をした覚えはないと断られてしまいます。

昼過ぎに幼い従弟がお金をもらいに訪ねてきました。とっさにお峯は、近くにあった硯箱の中に入れたあった二〇円の束から、二円だけ抜いて渡してしまいます。

その夜、外出していた主人と奥さまが大勘定として、全ての現金をまとめ始めます。お峯はその様子を見てそわそわし始めます。その時、奥様からあの硯箱を持ってくるようにと命じられます。

借金を断られたその二円がなくなっているのですから、誰が盗んだのか明白です。もうお峯は、まるで屠殺場に引き出される羊のような心境です。

この短編小説はあと七行を残すのみです。残り七行でどういう結末になるのか、ぜひ読んでみてください。（岩波文庫）

公民館図書室 年末年始のお知らせ

一休室期間一
12月29日（水）から
1月３日（月）まで

公民館正面にある本の返却ポストは12月28日（火）午後5時から1月4日（火）午前９時まで使用できません。